

インド韻律史におけるアパブランシャ語の役割

山 畑 倫 志

0. はじめに

アパブランシャ語 (Apabhraṃśa) は古代以降のインドにおいて一定程度文語としての地位を有していた言語である。この言語はあくまで文学のための言語として扱われ、現存する作品は全て韻文のものである。

そこに用いられる韻律には古典サンスクリット語の伝統的な韻律とは異なったものがしばしば見られる。一作品の中で使われる韻律の数も様々であり、仏教徒による *Dohakośa* のようにほぼ全て一種類の韻律で統一されているものもあれば、ジャイナ教徒による *Sudamaṣaṇacariu* のように九十二種類もの韻律が用いられているものもある。またその特徴としてはプラークリット諸語と同様、古典サンスクリットでは主である音節単位の *akṣaravṛtta* を用いることが少なく、モーラ(音量)単位の *mātrāvṛtta* が広範に採用されている。後述する十四世紀の韻律書 *Prākṛtapaiṅgala* においては 104 種の *akṣaravṛtta*, 76 種の *mātrāvṛtta* が挙げられており、前者がその数において後者を越えているが、実際にアパブランシャ語作品の中で用いられている韻律は大部分が *mātrāvṛtta* である。

また *tuk* と呼ばれる脚韻の形式が一般的になるのもアパブランシャ語の韻律からである。アパブランシャ語の韻律はほぼ全てと言っていいほど脚韻の形式に従っている。アランカーラには *yamaka* と呼ばれる同種の技法があるが、*tuk* の起源については諸説あり、未解明の状態である。さらにどこまでを脚韻とみなして音を揃えるかについてもさまざまであり、一音節のみ韻をふませる *puruṣatuk* や二音節もしくは三音節の韻を求める *komalatuk* といった分類もある。しかし母音+子音+母音のセットを脚韻とするパターンが実際には多い。

そのような特徴を有するアパブランシャ語韻律であるが、その由来、起源については未だ不明な点が多い。これは中期インド語の韻律とその前後の時代の韻律との関係が明らかになっていないためである。脚韻形式の由来なども古典サンス

(290) インド韻律史におけるアパブランシャ語の役割 (山 畑)

クリットのアランカーラを受け継いだものか、新たな規則として生じたのか判断がついていない。近代インド諸語の韻律との関係も明確とは言えない。本論ではいくつかの韻律書を概観して当時におけるアパブランシャ語韻律の位置づけを考察する。

・ akṣaravṛtta

pramāṇikā 韻

二脚, jagāṇa + ragaṇa + 短長からなる八音節

短長短 長短長 短長 短長短 長短長 短長

ṇarāhivāṇurāṇī / khivesae vilāṣiṇī // [Sudāṃsaṇacariu 1. 7. 13]

王を愛している妻ヴィラーシニーは悲しんだ。

・ mātrāvṛtta

candralekhā 韻

二脚, ハモーラ, 脚末は長短

短短短短短長短 短短短短短 長短

ravikaṇayakumbhu / lhasiyau susumbhu //

短短長短長短 短短長短 長短

duvai vi eha / phuḍu candaleha // [Sudāṃsaṇacariu 5. 7. 18-19]

太陽のように美しい黄金の壺が落ちた。

これも二脚の candralekhā 韻である。

madirā 韻, もしくは latākusuma 韻

二脚, 三十モーラ, 脚末は sagaṇa (短短長)

長短 短長短短長短 短長短短長短短 長 短 短 長 短短長

jattha siri aṇuhutta tahiṃ pi kayam puṇa bhikkhapavittaraṇam /

長短短長長短長短短長短短長 短 短 長 短 短 短 短短長

lohu ṇa lajjaṃ bhayaṃ ṇa vi gārau pemmasamaṃ pi tavacaraṇam // [Sudāṃsaṇacariu 11. 2. 3-4]

妻を得てもなお修行者の行いを広め, 欲望も恥も恐れも高慢もなく苦行を好んだ。

Piṅgala による *Chandaḥsūtra* 以来の韻律理論の伝統において時代を下るにつれ, プラークリット諸語やアパブランシャ語をも対象とする韻律書が著されている。Vyas¹⁾ は最初期のものとして *Nanditādhya*²⁾ や Virahāṅka の *Vṛttajāṭisamuccaya*³⁾, Svayambhū の *Svayambhūcchandas*⁴⁾ など挙げているが, ここではアパブランシャ語の韻律を大きく取り扱う以下三点の文献を見ていく。

1. *Chando'nuśāsana*

12世紀グジャラートのジャイナ教徒である Hemacandra はアパブランシャ語文学の形式を多方面でまとめた人物である。アパブランシャ語の文法は *Siddhahemaśabdānuśāsana* の一部において包括的に記述し、またサンスクリット語に起源を有しないとされる語の語彙集である *Deśināmamālā* を著した。その一連の著作の一つとして韻律書である *Chando'nuśāsana* がある。

Hemacandra の活動した西インドは10世紀前後からジャイナ教徒によるアパブランシャ語文学が盛んであり、現存する文献の量も他地域のものが数点しか残っていないのに比べて数百点以上が写本として残っており、当地域でのアパブランシャ語による創作の相当の流行を示唆する。そのような状況下で Hemacandra の各著作が生まれており、そのためか他地域では早くに廃れたと思われるアパブランシャ語がかなり後代まで使用されている。

特にアパブランシャ語の韻律はそれ以前にはまとまった形で整理されておらず、それ以後に作られた韻律書である *Chandaḥkośa* や *Prākṛtapaiṅgala* など同種の文献にも大きく影響を与えている。

Chando'nuśāsana は伝統的な古典サンスクリット語の韻律に加えてプラークリット諸語およびアパブランシャ語で用いられる韻律を記述したものである。その構成は全八章のうち冒頭の三章にサンスクリット語の韻律を配し、第四章がプラークリット諸語、そして第五章から第七章までがアパブランシャ語の韻律となっており、第八章に補遺を付している。

さらにアパブランシャ語部分は脚数の不規則なもの(第五章)、Sandhi や Kaḍavaka など章や節の切れ目に挿入される韻文用のもの(第六章)、二脚のもの(第七章)に分類している。そこには合計して141の韻律が列挙されているが、それらを形式から分類すると各行の音の数が同一か否かにより sama, ardhasama, viṣama に分けられ、さらに行の数によって dvipadī, catuṣpadī, pañcapadī, ṣaṭpadī, aṣṭapadī があり、dvibhaṅgī, tribhaṅgī の十種に分類される。bhaṅgī とは複数の韻律を組み合わせたものであるが、その種類は Hemacandra においては数種しか挙げられていない。

また、当時の韻律の定義には未だ揺れが確認される。アパブランシャ語の説話作品には自ら韻律名などに言及しているものが見られるが、それらとの齟齬は各所に見られる。例えば東部アパブランシャ語の代表的な韻律であり、後代には中

(292) インド韻律史におけるアパブランシャ語の役割 (山 畑)

世ヒンディー文学でよく用いられた dohā 韻は次のようなものが一般的である。

dohā 韻

四脚，第一脚と第三脚が十三モーラ，第二脚と第四脚が十一モーラ

短短長短短短短短長短 短短短短長短短短短

nitarāṅga sama saharjāṛā / saalakalūsabirahiḥ /

長短長短短短長長短 長短長短短短短短

pāpapuṇṇa rahie kuddha / nāhi kāṇhu phuḍa kahiḥ // [Dohākośa by Kāṇha 10]

生来の姿に曖昧さはなく，すべての罪惡を平等に解き放つ。

罪惡も福德も何も残らない。カーンハはそのことを明瞭に述べた。

しかし Hemacandra は同形式の韻律に別の名前を与えている。

same ekādaśa oje trayodaśa kusumākulamadhukara // [Chando 'nuśāsana 6. 20. 35]

kusumākulamadhukara 韻は偶数脚 11 (モーラ)，奇数脚 13 (モーラ) からなる。

だが大部分は以下のようにおおむね他のアパブランシャ語作品と一致する。

caturmātro laghur dvimātro laghuś ca candralekhā // [Chando 'nuśāsana 7. 65]

candralekhā 韻は 4 モーラ，短音節，2 モーラ，短音節からなる。

2. *Prākṛtapaiṅgala*

ラージャスターン，14 世紀の作品と推定されている⁵⁾。mātrāvṛtta が 76 種，akṣaravṛtta が 104 種の合計 180 韻が挙げられている。Hemacandra のようにサンスクリット語の韻律を含めたり，プラークリット諸語とアパブランシャ語を分けたりはせず，一つのカテゴリーにまとめられている。ここでも dohā 韻の例を挙げる。

teraha mattā paḍhama paa puṇu eārahiṃ deha /

puṇu teraha eārahai dohā lakṣhaṇa eha // [Prākṛtapaiṅgala 78]

一脚目は 13 モーラ，次は 11 (モーラ) を与えよ。

それから (三脚目と四脚目は) 13, 11. それが dohā 韻である。

3. *Chandaḥkośa*

Prākṛtapaiṅgala と同じく 14 世紀の作品であるが，より後代のものとされている。おそらく西インド。74 の詩節のみの韻律書であるが，ほぼ完全にアパブランシャ語のみの韻律書となっており，詩作の際の実用に重きをおいたものと考えられる。

terahamattā visamapai sama eyāraha matta /

aḍayālisam matta savi dohā chaṇḍa nirutta // [Chandaḥkośa 21]

脚が (全て) 同一ではなく，(奇数脚は) 13 (モーラ) で偶数脚は 11 モーラ。

合計して 48 モーラ、(それが) dohā 韻と呼ばれる

4. まとめ

Hemacandra の韻律書はアパブランシャ語の韻律をサンスクリット語やプラークリット諸語のそれとは区別し、またかなりの部分を割いて記述している。これは文学のための言語としてのアパブランシャ語を理論づけた点で画期的である。後代に現れる同種の文献では韻律の上ではプラークリット諸語とアパブランシャ語とを区別してはいない。確かに両者は音韻学的にほとんど違いがないため互いに韻律を流用することは容易であったろうが、これは文語としてのアパブランシャ語の位置づけを考察する上で何らかの手がかりになると思われる。

また akṣaravṛtta から mātrāvṛtta への変化、脚韻の多用などは言語自体の変化もそれを後押しする要因になると思われる。プラークリット諸語、アパブランシャ語を用いる著作者たちがほぼ mātrāvṛtta へと移行したことはその裏付けとなりうる。ただ、Velankar は、mātrāvṛtta は詩作の際の自由度が上がるが、そのぶん韻律全体の規律がゆるく、韻文としてのリズムが失われがちであり、そこを補うために一行をより細かく mātrā の数で区切る手法である yati についてもアパブランシャ語と深く関係があると主張している⁶⁾。この点についても今後の検討が必要であろう。Velankar の主張するようなことは韻律書内の理論としては顕在化していないが、上に挙げた韻律書群を検討していく中でそのような事象の起こりも把握されていくことと思われる。

また Vyas は mātrāvṛtta の多用や tuk などの特徴は古典サンスクリットからの伝統によるものではなく、物語の歌い手たちの技術に由来するのではないかと仮説を立てている⁷⁾ が、それは韻律の観点からだけではなく、アパブランシャ語諸作品や言語特徴そのものの分析も踏まえる必要がある。

これら韻律書がインド西部に固まって現れるということは文語としてのアパブランシャ語が文学作品全般を著すための言語として認識されていたことを改めて示すものと考えてよいだろう。インドの他地域においてはこれほど組織だった記述は存在しない。

アパブランシャ語韻律使用の実例としてジャイナ教説話の一つ、*Sudāmsanācariu* に用いられている韻律を挙げる。

(294) インド韻律史におけるアパブランシャ語の役割 (山 畑)

mātrāvṛtta

韻律名	脚	音量	脚末
Ānanda	2	5	短
Karimakarabhujā	2	8	短長
Kusumavilāsikā	2	8	短長 脚頭 ^{na}
Candralekhā	2	8	長短
Madanavilāsā	4	8	長長
Madana	2	8	
Madhubhāra	2	8	
Jambhetīyā	4	9	ra
Amarapurāsundarī	2	1	短長
Cārupadapamkti	2	1	短
Dīpaka	4	1	短
Tomarekhaṣṣamālā	2	12	長短
Khaṇḍayam	2	13	ra
Gandhodakadhārā	4	13	na
Dohā	4	13,11, 13,11	
Viṣiloyachamda	2	15	na
Siṃhāvaloka	2	16	sa
Uppahāsinī	2	16	短長短 長
Rayaḍā	2	16	bha
Alilla / Aḍilla	2	16	短短
Troṭanaka	2	16	短長
Paddhaḍiyā	2	16	ja
Pādākulaka	2	16	全短
			長
			短長
Vilāsini	4	16	短長

韻律名	脚	音量	脚末
Vilāsini	4	16	短長
Mattamātanga	2	18	ja
Nidhāyikā	2	19	
Āvalī	2	2	短長
Urvaśī	2	2	ra
Cappai / Caupahī	2	2	短短
Mandayāra	2	2	短長
Madanāvatāra	4	2	短
Śaśītilaka	2	2	全短
Sārīy	2	2	長短
Maṃjari	2	21	ra
Rāsākulaka	2	21	na
Māgadhaṇakuḍiyā	2	22	
Helādvipadī	2	22	長長
Kuvalayamālinī	2	24	長
Śālabhaṃjikā	2	24	短長
Candralekhā	2	24	
Kāmalekhā	2	27	短短
Bhramarapadā	2	27	短短
Gāhā	2	27	
Dvipadī	2	28	短長
Racitā	2	28	短長
Vijjurā	2	28	短長
Ṣaṭpadī	2	28	sa
Āraṇāla	2	31	
Madirā / Latākusuma	2	31	sa

akṣaravṛtta

韻律名	脚	規定
Madhyama	2	ta
Kāmabāṇa	2	ra + 短

韻律名	脚	規定
Samānikā	2	ra + ja + 長短
Citrapadā	2	bha × 2 + 長長

インド韻律史におけるアパブランシャ語の役割 (山 畑)

(295)

Siddhaka	2	ra + 短長	Vidyunmālā	2	長 × 8
Mauktikadāma	2	ja × 2	Anusāratulā	2	短 × 8
Somarājī	2	ya × 2	Tomara	2	長短 × 4
Mālātī	2	ja × 2	Rasāriṇī	2	ra + ja + ra + 短
Uṣṇikā	2	ra + ja + 長	Indravajrā	2	ta + ta + ja + 長 長
Pramāṇikā	2	ja + ra + 短長	Upendravajrā	2	ja + ta + ja + 長 長

- 1) Bhola Shanker Vyas, 2007, *Prākṛtapaiṅgalam*, Ahmedabad: Prakrit Text Society.
- 2) ジャイナ教徒による. gāthā 韻の下位分類として種々の韻律を示すが, それらは後代のプラークリット諸語の韻律と関連づけることができる. H. D. Velankar, 1933. 'Gathalakshana of Nanditaddhya', *Annals of Bhandarkar Oriental Research Institute*, vol. 12. 所収
- 3) 次の Svayambhū や Hemacandra よりは以前のものとされている. H. D. Velankar, 1925. 'Vrittajatisamuccaya of Virahanka', *Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society*, vol. 5. 所収.
- 4) 作者は *Paumacariu* を著した Svayambhū とは別人.
- 5) Bhola Shanker Vyas, *Prākṛtapaiṅgalam*, pp.362 - 364.
- 6) H. D. Velankar, 1933. 'Apabhraṃśa Metres', *Journal of the University Bombay. Arts and Law*, No.1. Vol.2. Bombay. p.44
- 7) Vyas, p.524.

〈キーワード〉 アパブランシャ語, 韻律学, Hemacandra, *Chando'nuśāsana*

(北海道大学大学院専門研究員)